

バイユー＝タペストリーにみる文化的多元性

山 代 宏 道

【キーワード】 ノルマン征服・バイユー＝タペストリー・異文化接触・文化的多元性・図像資料

はじめに

ノルマン人によるイングランド征服(1066年)の様子を視覚的にいきいきと描写しているバイユー＝タペストリーは、ロマネスク芸術の典型例として位置づけることができる。11世紀のヨーロッパ各地で、イギリス、フランス、スペイン、イタリアなど地域的影響を受けつつ完成していったロマネスク建築と同様に、¹⁾バイユー＝タペストリーにも古典的要素、キリスト教的要素、ゲルマン的要素、イスラム的要素、ビザンツ的要素といった多様な文化的影響が認められる。リネン布に8つの色調の毛糸で刺繍された「タペストリー」は、物語を描写する主要な部分と上下の縁部分から構成されている。さらに主要部分の描写に関連して簡潔な説明文が付けられている。

とりわけ上下の縁部分には、多種多様な動植物と人物像が描かれている。ゲルマン的な怪物、古典的な人獣、当時南仏やスペイン産が有名でノルマンディー公ウィリアムも贈られたと伝えられる馬や鳥、魚、犬、牛、狼、駝鳥などが見られる。それらは、ロマネスク様式の教会堂の柱頭やフリーズ(教会壁面の帯状彫刻)装飾を連想させる。さらに、縁部分には、イソップ物語とみられる寓話の場面が描かれている。たとえば狐とカラスとチーズの話は、タペストリーで3回現れるが(場面4・16・24)、イングランドの最有力貴族ハロルドとみられるカラスと、ノルマンディー公ウィリアムとみられる狐との間のどの位置にイングランド王冠とおぼしきチーズが描かれているかは、現実の王位の行方を描く主要部分の物語展開と密接に関連しているようである。²⁾

それでは、ノルマン征服を描くバイユー＝タペストリーの性格は、世俗的なものであると言えるのだろうか。たしかにタペストリーには、ブルターニュの3城やヘイスティングズ城が見られ、なによりも後半のほとんどは戦闘準備とヘイスティングズの戦いの場面である。しかし、他方、宗教的要素としてポシャム教会、モン＝サン＝ミシェル修道院、ウェストミンスター修道院が描かれ、さらにバイユー司教座教会のものと思われる聖遺物箱が描かれている。

本稿では、バイユー＝タペストリーのもつ文化的多元性を明らかにすることを目的としながら、主として、聖と俗という側面からタペストリーの性格づけをおこなっていききたい。

1 タペストリーの展示

バイユー＝タペストリーを理解するためには、作品自体の性格を理解することが必要であるが、そのための一方法は、タペストリーの展示場所を知ることである。しかし、この作業は容易なことではない。バイユー＝タペストリーは、どこに展示されたのか。タペストリーが描く物語の世俗的性格のゆえに、それが展示された場所は教会ではないとする解釈が考えられる。しかし、当時、聖俗の区別はあいまいであり、世俗の王侯が宗教的芸術品をもっていたように、教会が世俗的美術品を所蔵することも珍しくなかった。さらに、バイユー＝タペストリーがそもそも世俗的であるかは議論のある点である。³⁾

タペストリーの展示場所について議論する際に、忘れてならないのは、それが定まった備品というより運搬可能な芸術品であったということである。バイユー＝タペストリーは、1476年バイユー司教座教会参事会の財産目録において初出とされ、当時は毎年バイユー司教座教会で展示されていたようである。しかし、一箇所にずっと飾られていたわけではなく、数カ所で展示された可能性もある。制作場所がイングランド、おそらくカンタベリーであったとすれば、ノルマンディーに渡る前にイングランドで展示されていた可能性もある。そうであれば、タペストリーが聖俗両方の場所で展示された可能性も否定しきれないであろう。⁴⁾

このように11世紀の展示スタイルが確認できないとすると、ギャメソンの言うように、展示場所をめぐる個別の議論はあまり意味がないのかもしれない。かれは、むしろ展示にかんする一般的性格として、次の5点に注目すべきであると主張する。1) 現存のバイユー＝タペストリーの状態から判断すると保存状態が良好であったと考えられる。短期間、暗い場所で展示されたのであろう。15世紀では6月の一定期間に限定されていた。2) 説明文は読まれるためのものであり、そうであれば、タペストリーは頭上あまり高くない位置に展示された。3) 一時的展示であれば、大きな不便を引き起こすことはなかった。展示中、タペストリーがアクセサリーの機能を果たしたかどうかは二義的重要性しかない。4) 見物人の目が展示場所の暗さになれば、タペストリーの図像は識別できたはずである。教会堂でのローソクの火によるガイドツアーも推定される。5) 展示位置が見る者の物語観に影響を与えたはずである。場面や登場人物と関連のある展示場所、たとえば、タペストリーでのオドーの登場場面と現実の司教座教会の司教席とが近いとか、ハロルドが誓約する場面と実際の祭壇との近さとか、見物人の見方に影響を与えたにちがいない。⁵⁾

2 異文化接触

ノルマン征服は、ノルマン人とアングロ＝サクソン人という異なる民族の接触を引き起こした。そのため、征服後、ノルマン征服に関する種々の見方や解釈がなされるのは当然であったといえ

よう。大まかに、イングランド的解釈とノルマン的解釈に分けられる。それと同様に、バイユー＝タペストリーという視覚的資料の各場面についての解釈の相違も、見物人の立場の違いによって生じた。そのことは、なによりもまず、バイユー＝タペストリーが異民族・異文化接触の産物であったことを示している。

1) ノルマン征服の正当化

ノルマン征服が征服者と被征服者をつくりだしたとすれば、バイユー＝タペストリーの制作目的は征服者ノルマン人による征服の正当化であったといえるのであろうか。たしかに、バイユー＝タペストリーの目的がノルマン征服の正当化であったことは、1066年のヘイスティングズ戦の直前、デンマーク王ハロルド＝ハルドラーダと戦ったハロルド王に勝利をもたらしたスタムフォードブリッジの戦闘がタペストリーでは省略されていることから示唆される。あくまでノルマン側の視点から描かれているとみなさざるをえない。

バイユー＝タペストリーは、幅50cm、長さ70mほどの作品で、より多くの人々の目に触れるように作られていると判断される。もし、本として作成されていたなら、聖職者を中心とした文字の読める少数の人々にしか読めなかったであろう。石に彫られていたら重くて移動させるのも困難であり、その場所近くの人々は見たであろうが、他の土地の人々の目に触れることは少なかったであろう。タペストリーが教会に展示されていたと想定すると、そこに描かれている図像は、当時、文字の読めない人々に大いなる印象を与え、かれらの想像力をかき立てたはずである。そればかりでなく、タペストリーの目的の中には、信者たちへの宗教教育という目的も含まれていたのかもしれない。教会に展示されることは多くの一般信者の目に触れることであった。さらに、タペストリーは巻物として持ち運ぶことができたため、教会以外の様々な場所で展示することが可能であり、より広範囲の人々に見せることも可能であった。このことはノルマン征服正当化のプロパガンダのためには好都合であったであろう。

タペストリーの目的がノルマン征服、すなわちウィリアム公の正当化であったと考え、ハロルドの英雄的行為を描く必要はないはずであるが、タペストリーの前半ではハロルドの登場回数はウィリアムをしのぐほどである。たしかに、ノルマン征服の正当性を示し、アングロ＝サクソン人たちにハロルドの不当性を物語るために、ハロルドを中心に描くことがあってもおかしくない。あるいは、アングロ＝サクソン貴族たちは、自分たちが選出したハロルドを殺され、自分たちの所領を奪われており、そうしたアングロ＝サクソン人たちが感情移入しやすいように、前半ではハロルドを中心に物語を描きながら、征服の正当性を受け入れやすくすることが意図されていたのかもしれない。

バイユーでウィリアムへの忠誠を誓い、かれの王位継承を確認したハロルドの誓約どおりに事態が進んでいけば、両民族は平和的に融合することができたかもしれない。しかし、実際には、

エドワード王の死亡後、アングロ＝サクソン貴族たちによるハロルドの国王選出が行われた。ハロルドの意志がどうであったかはともかく、この事実はハロルドによる誓約違反とみなされた。

ウィリアムのイングランド王位に対する主張の根拠のひとつは、エドワード証聖王による約束であった。1051年ウィリアム公は父親の従兄弟であったエドワード王を訪問した際に、カンタベリー大司教ロバート＝オヴ＝ジュミエージュを通じてイングランド王位継承を約束されたようである。1064年エドワード証聖王は、使者としてハロルドをノルマンディー公ウィリアムのもとへ派遣した。ウィリアムへの王位継承の約束を確認するためである。ハロルドは王の命令に逆らうこともかえって不利と判断して、しぶしぶ出帆したが、ソム川河口のサン＝ヴァレリーに漂着し、ポンテュー伯ギーに捕らえられた(場面7)。ウィリアムは身代金を払いハロルドを釈放させた(場面13)。⁶⁾

ハロルドは、今度はウィリアムのとらわれの身となったが、イングランドの有力貴族としての寛大な取り扱いを受けているように描かれている。歴史叙述の伝えるように、ハロルドがウィリアムの王位継承権を確認する目的で派遣されたエドワード王の使者であったとすれば、そうした厚遇も不思議ではない。⁷⁾ タペストリーによれば、ウィリアム公はブルターニュの反乱鎮圧にハロルドを同行させている(場面16～20)。⁸⁾ ブルターニュの城を陥落させた帰途、ウィリアムはハロルドの活躍を認めてかれに武具一式を与えている。これに対し、ハロルドは、バイユーでウィリアムへの臣従を誓った。その際、次のイングランド国王はウィリアムが継承することを誓約したはずである(場面21・23)。

エドワード王の臣下であるハロルドが、ウィリアムに対してさらなる臣下としての忠誠を自由意志によって誓ったのかどうかという点に関しては、それが不可能ではないにしても、きわめてノルマン側に好都合な描写である。しかし、ハロルドが帰国後エドワード王と接見報告している場面(25)で、エドワードが譴責しているようであり、ハロルドが首をたれて申し訳なさそうにしている描写からは、ハロルドの忠誠宣誓の事実が示唆されており、その意味ではノルマン側の立場からすれば一貫性が認められるといえるのかもしれない。⁹⁾

バイユー＝タペストリー作成目的のひとつは、あきらかにノルマン征服の正当化である。しかし、その目的のために、あからさまな正当化の手法が取られているのかどうかは検討の余地がある。被征服者であるアングロ＝サクソン人ができるだけ反発することなくノルマン側の主張を受け入れるように作成されるべきであった。そのためには、作品はできるだけ客観的に描かれる必要があった。タペストリーでは、とくに前半におけるハロルドの英雄的行為も含めて考えると、ハロルドとウィリアムの描き方は、両者がほぼ同等の存在感をもつものとして描かれている。あたかもアングロ＝サクソン人の反感を引き起こすことを警戒しているかのようである。タペストリー制作依頼者(パトロン)の意図を十分に理解したうえでの制作責任者(マスター)の工夫なのであろうか。

ノルマンディー公ウィリアムは、征服後、アングロ＝サクソン時代からの連続性を重視した支配を行っていく。ウィリアムはイングランドで見いだした統治のための効率的組織を継承している。ノルマン人たちは、イングランド政治史における不安定な時期を利用した冒険者としてではなく、エドワード証聖王の合法的後継者としてウィリアムを位置づけようとしている。¹⁰⁾ アングロ＝サクソン人の抵抗を抑制するためには、支配者の交代が伝統的生活に大きな変化を引き起こさないとさせることが必要であった。こうした背景において、支配者交代の正当性を宣伝するものとして、バイユー＝タペストリーは、征服後の異民族支配のための重要な役割を担っていたといえよう。

2) アングロ＝サクソン人の技能

文化の領域では、ノルマン人たちはイングランド文学というより、アングロ＝サクソン職人、すなわち金細工師、象牙彫刻家、造形芸術家、刺繍職人などの技能を高く評価していたようである。刺繍はイングランド人たちが卓越していた技能であった。中世ヨーロッパを通じてイングランド的作品 (opus Anglicanum) といえば、それはイングランド刺繍を意味していた。統治機関におけるアングロ＝サクソンの卓越性は征服王に勝利を確実にするための道具を与えた。同様に、ノルマン人たちは、ヘイスティングズの勝利を記念しようとするときイングランド職人たちの方に向かったのである。¹¹⁾

バイユー＝タペストリーは、毛糸の刺繍で物語が描かれている。刺繍は被征服者の側の優れた技術であり、タペストリーはそれを利用して作成された。バイユー＝タペストリーとは、征服者の勝利を讃えているかにみえる作品であるが、被征服者側の技術によって作られた異民族・異文化接触の産物である。ベルンスタインは、タペストリー解釈において聖書の影響を指摘し、そこにヘブライ的要素、すなわちユダヤ人と同様の被征服者としてのアングロ＝サクソン人制作従事者の立場の反映を認めようとしている。そうした視点から、ノルマン征服の正当化の主張の中にイングランド的立場がひそかに描写されているとする「イングランド人陰謀説」を提唱したのである。¹²⁾

毛糸の刺繍は、材質的にそれほど脆いものではなく、かなりの耐久性もあるようである。パトロンは自分の意図を多くの人々に受容してもらいたいと考え、制作責任者は自分の作品を評価してもらい長く後世に残したいと願うのは当然であろう。それならば、材質的に耐久性が要請されていたはずである。布地に毛糸の刺繍を施した巻物は、作品完成後に持ち運びが容易であることに加えて、制作時にも描写に失敗した箇所の修正が容易であったのかもしれない。たとえば、絵の具であれば、修正方法は削るか塗りしかなく、作品を傷つけたり鮮明さを失わせ構成上の変更も余儀なくされるかもしれない。刺繍であれば、失敗箇所のみ修正ですんだであろう。

バイユー＝タペストリーは、征服というノルマン人とアングロ＝サクソン人の接触の結果成立

したものである。描かれた内容はノルマン的視点によるものであるが、制作技術にはアングロ＝サクソン人が得意であった刺繍による。もし、バイユー＝タペストリーが刺繍によるものでなければ、アングロ＝サクソン人の立場をひそかに描写したといった解釈が生じる余地はなかったかもしれない。おそらく単なる建国物語か英雄物語として扱われていたであろう。バイユー＝タペストリーは、その異文化接触の産物としての性格から、見る者の立場によって解釈が違ってくるという多面性をもっている。

3) 異文化接触の成果

バイユー＝タペストリーは、ノルマン文化とアングロ＝サクソン文化との接触の産物である。ノルマン人であるパトロン(制作依頼者)が考えた内容(物語)を、アングロ＝サクソン人である制作従事者が刺繍(図像)に描いた。どちらが欠けてもこうしたタペストリーは存在しなかったであろう。たしかにタペストリーはノルマン征服の産物であるが、他方で、征服(衝突)でない異文化交流の事例もある。たとえば、征服前から始まるエドワード証聖王によるウェストミンスター修道院の建設(場面26)があり、それはノルマンディーのジュミエージュ修道院をモデルとするものであった。しかし、同時並行的に建設されていったその成果は、北西ヨーロッパ地域におけるロマネスク建築の好例と位置づけることができよう。¹³⁾

バイユー＝タペストリーにおいては、誓約に違反したハロルドに対する批判は認められるとしても、奇妙なほどにアングロ＝サクソン人全体に対する批判を見いだすことは困難である。とりわけ前半においては、たとえば、ハロルドがウィリアムの臣下を流砂から救っている場面(17)のように、ハロルドでさえ時々には英雄視されているし、かれの功績を評価していると判断されるウィリアムの姿もある。ハロルドに対して武具を授与している場面(21)がそれである。しかし、だからといって、バイユー＝タペストリーの前半はハロルドとウィリアムの友好関係を、後半は敵対関係を描写しているとか、文化接触におけるノルマン人とアングロ＝サクソン人の対等な役割を示唆しているとすることはできない。せいぜいのところ、前半でハロルドが主人公とみなされるなら、それはタペストリーが征服者の立場の押しつけというより、アングロ＝サクソン人に受け入れやすい描写方法を採用していると解釈すべきであろう。

ところで、ノルマン征服は、あきらかに異民族・異文化の接触を引き起こしたのであるが、両民族・両文化の異質性のみを指摘すべきではなかろう。南イタリア、シチリア、アンティオキア、イベリア半島におけるノルマン人の場合と異なり、イングランドへの遠征はイスラム教徒に対してではなく、キリスト教徒に対するものであった。その意味では、同様にローマ教皇の承認を得ていたとはいえ、キリスト教徒による「十字軍」としてよりも「墮落したイングランド教会を救うための聖戦」としての性格を強くもっていた。征服によって世俗支配者たちの交代が急速に進んだが、ウィリアムは同じキリスト教徒として、征服後にノルマン化政策を進めていったとはい

え、民族的相違のみによって司教や修道院長たちの交代を急激に進めることはできなかった。

いわばバイユー＝タペストリーは、ノルマン人とアングロ＝サクソン人の両民族に共通するキリスト教の世界観（価値観）の中で描かれているのである。この点を忘れてはならない。たしかに、異なるもの（異民族・異文化）が接触してはじめて多様性が生まれる。バイユー＝タペストリーもそうした成果である。他方、ノルマン人やアングロ＝サクソン人は共にキリスト教徒であった。この場合、それを同じ価値観（一元性）の中での異質なものの接触事例とみなすべきであろうか。民族的、文化的には異質であっても、同じキリスト教を信じている人々であった。たとえば、かれらはキリスト教的世界観を共有しており、「神罰」を恐れる共通の価値観をもっていた。その意味では、その中に多様な文化的要素を含みながらも、バイユー＝タペストリーは、いずれもキリスト教徒である2つの民族が作り上げた文化的遺産として位置づけることができるのではないか。¹⁴⁾

ノルマン人に顕著であるとされるかれらの能力・実力主義は、ノルマンディーでの聖職者や騎士の登用にあって発揮されていた。その基準は、アングロ＝サクソン人にも適応されたのであろうか。また、アングロ＝サクソン人支配のための、もしハロルドが神に背くという偽誓がなければ、寛大な扱い方をしていたであろうか。ノルマン人の能力・実力主義では出身を問わないとされた。どこの文化、どこの出身であるかは問題にしない。結果主義で、すぐれた成果をあげれば良かった。軍事的成功、あるいは修道院改革においても同様であった。こうした精神性の中で、異教の神々もキリスト教の教会堂に貢献する要素として位置づけられて取り込まれていった。その意味では、異教的雰囲気をもつ動植物が描かれている上下の縁部分をもつバイユー＝タペストリーも、全体に役立つものであれば、多元的で異質な要素を積極的に取り込んでいったといえるのではないか。

3 オドーの性格

バイユー＝タペストリーのパトロン（制作依頼者）として、現在最も有力視されているのが、ウィリアム公の異父兄弟であるバイユー司教（在位、1049/50-97）で征服後ケント伯になったオドー（1030/40-97）である。オドーは登場人物の中で最も宗教的な人物とみなされるが、ここでは、タペストリーにおけるかれの描かれ方を手がかりにしながら、バイユー＝タペストリー全体での聖俗の相互関係を検討していきたい。

バイユー＝タペストリーの後半になって、バイユー司教オドーは4回登場する。¹⁵⁾ 第1の場面（35）では、ハロルドがイングランド王に即位したとの知らせが届いた直後、ウィリアム公はオドーと相談している。オドーはイングランド遠征のための船団の建造を助言し、その命令は直ちに発せられ実行されていく。ここでは、オドーは、司教でありながらノルマンディー公の側近として、結果的にノルマン征服を勝利へと導く過程の最初の段階において重大な役割を果たした

者として描かれている。¹⁶⁾

第2の場面(43)では、イングランド上陸後の食事において、オドーはウィリアムと並んで座り、食べ物を祝福している。そこでは聖職者としての役割を果たしている。

それにつづく第3の場面(44)では、オドーは、もう1人の兄弟であるロバートとともにウィリアムに対して戦略上の助言を与えている。すなわち、ハロルドと戦うためにイングランド北部に向かうかわりに南部に留まり、ヘイスティングズに築城することを助言した。ここでもノルマン征服の帰趨にとって重大な軍事的決定に参加しているのである。

第4の場面(54)では、オドーは戦場に登場する。ヘイスティングズの戦場でノルマン軍の志気が弱まった局面において鎚矛を振り回しながら登場し、とくに若い兵士たちを鼓舞しているようである。この場合も、オドーはノルマン軍の勝利へと導く重要な軍事的機能を果たしている。¹⁷⁾

バイユー司教オドーは、この時期、戦争参加が知られる立身出世した聖職者のうち最も有名な人物であろう。かれは、征服後のイングランドでケント伯となり、ウィリアム王に次いで有力であった。ノルマン人の直接受封者たちのうち最も富裕であった。オドーの主な経歴はつぎのようであった。1080年、イングランド北部への遠征軍を率いた。¹⁸⁾ 1082年には、勝手に国王軍を移動させたとしてウィリアムによって逮捕投獄された。1087年釈放されるが、ノルマンディー公ロバートを支持してウィリアム2世に対して反乱を企て失敗、ノルマンディーへと帰国。1097年十字軍への途上、シチリアのパレルモで死亡した。¹⁹⁾

1) パトロン

バイユー司教オドーが、バイユー＝タペストリーのパトロンとして有力視されるようになった理由としては、タペストリーの史料上の初見が15世紀のバイユー司教座教会参事会の財産目録においてであったこと、タペストリーの制作目的がノルマン征服の正当化でありオドーがウィリアムの兄弟であったこと、さらにタペストリーにおいてオドーやかれの家臣とみなされる3人の騎士が名前を明記されて登場することなどがあげられる。

オドーは、征服後、豊かな財力によってバイユー司教座教会を再建していくが、その献堂式(1077年7月14日)に間に合うように、タペストリーの制作を依頼した可能性がある。その場合、ノルマン征服の正当化はもとより、かれの個人的な活躍を物語る作品の制作が要請されたことも推測される。そうした解釈からすると、バイユー＝タペストリーのうちに、同時代のヨーロッパで流行していたシャンソン＝ドゥ＝ジェスト(武勳詩)の影響を見ることができるかもしれない。とりわけ『ローランの歌』の影響が想定される。その作品におけるシャルルマーニュとローランとの関係が、タペストリーでのウィリアムとオドーの関係として類推されることになる。²⁰⁾

バイユー＝タペストリーにおけるオドーの登場回数は、直接的には4回であり、ハロルドやウィリアムと比べて多くはない。しかし、その活躍は多面性なものとして描かれ、なによりもウイ

リアムを補佐しながらノルマン征服を勝利へと導いた功労者として描かれているようである。くりかえせば、ウィリアム1世の側近として艦隊建造を助言し、司教として食事を祝福し、側近としてヘイスティングズ築城の決定に加わり、戦場においてノルマン軍を鼓舞している。さらに間接的ながら見逃せないのが、タペストリーの前半のクライマックス場面ともいえる、ウィリアムに対するハロルドの誓約場面(23)では、ハロルドが手を置いている聖遺物はバイユー司教座教会のそれであり、それを保持していたのは司教オドー自身であったという事実である。さらに、オドーには、かれが投獄されたときに、ウィリアムに対してノルマン征服における自分の功績を示すためにタペストリーを作成させたとの可能性も推測できる。

ところで、バイユー＝タペストリーの制作目的がノルマン征服の正当化であったとすれば、それはアングロ＝サクソン人に対してなされるはずであった。それならばタペストリーは、イングランド側に展示しておく方が有効であったのではないか。もし、それがバイユーに展示されていたとするならば、タペストリーのもつオドーの英雄物語としての性格が強調されることになるのかもしれない。オドーの英雄化が意図されていたとする場合、かれが後世に名を残すことを目的としていたと考えるのは困難であろう。なぜなら、毛糸刺繍にはかなりの耐久性があるとはいえ、タペストリーはあくまで布製である。実際、バイユー＝タペストリーの最後の部分は破損しており、現在までに全部が失われてしまっていたとしても不思議ではない。したがって、オドーの目的はかれの同時代人に対してアピールすることを目指していたと解釈すべきであろう。

2) 司教と国王側近

バイユー＝タペストリーの制作依頼者とみなされるバイユー司教オドーの役割はどのようなものとして規定されるのであろうか。司教ではあるが、軍事的顧問としての機能も果たしているようである。C.N.L.ブルックは、オドーのような働きをした司教を‘bishop-prince’と呼ぶことで性格づけている。²¹⁾ 当時のヨーロッパでは、有力諸侯の男子は14才くらいまでは、将来騎士と聖職者のどちらの経歴でも自立していけるように両方の訓練を受けていた。したがって、成人してからも、かつての訓練もあってオドーのように戦場で活躍する司教も珍しくはなかった。また、征服後、ウィリアムが司教や修道院長たちに所領と引き替えに騎士奉仕を課したとき、司教や修道院長が自ら騎士たちを引き連れて軍事行動をとることを想定していたはずである。たしかに、1075年の反乱のとき、ウスター司教ウルフスタンがヘリフォード伯ロジャーの東進を阻止した事例がある。さらに、戦争勝利を願って司教たちが戦場で祈願し、兵士たちに祝福を与えることは通常のことであった。²²⁾

こうしてみると、タペストリーに描かれているオドーの行動は11世紀の高位聖職者にとって適切なものとみなされていたといえよう。しかし同時に、注目すべき点として、バイユー＝タペストリーの場面(44)では、戦略について協議しているウィリアムとロバートは剣をもっているの

に比べて、オドーは持っていない。また、ノルマン軍を鼓舞するために戦場に登場している場面(54)では、オドーは剣をもたず槌矛を手にはしている。したがって、戦闘における重大局面で登場しているが、実際にはオドーが戦ってはいないのではないかとの解釈も存在することになる。ヘイスティングズでは、クータンス司教ジェフリーと戦勝祈願の祈りを行っていた。²³⁾

当時、ヨーロッパの他地域でも高位聖職者たちが軍事的役割を果たしているのが見いだされる。たとえば、ドイツ大司教の事例として、ケルン大司教ブルーノ(在位、953-65)がトリールやマインツで参戦し、同ケルン大司教アンノは1074年反乱を鎮圧している。イングランドではヘリフォード司教レオフガールがウェールズ王と戦い(1056年)、ピーターバラ修道院長レオフリックもヘイスティングズ戦にアングロ＝サクソン側で参戦している。クータンス司教ジェフリーは、ヘイスティングズでノルマン側で戦い、征服後、イングランド西部での反乱鎮圧軍に参加(1069年)、2年後イースト＝アングリアでは反乱を抑圧している。オルデリック＝ヴィターリスは司教ジェフリーが『詩編』よりも武器においてより長けていると批評しているほどである。²⁴⁾

4 聖と俗

バイユー＝タペストリーの中で最も宗教的な登場人物である司教オドーでさえ、これまで検討してきたように軍事的機能を果たしていたとすると、タペストリーを全体としてみたとき、その性格は世俗的なものであると判断できるのであろうか。一見すると、ノルマン征服がそのテーマであり、英雄物語としても『ローランの歌』や『モールドンの戦い』(991年、アングロ＝サクソン人がデイン人と戦って敗北)との比較が可能であるとすると、バイユー＝タペストリーは世俗的と規定できるようにも思える。しかし、それらの物語にしても同様であるが、まったく純粋に世俗的というわけではなさそうである。

ギャメソンは、バイユー＝タペストリーの性格が現代人の目にはあいまいなものになっていると主張している。現代人は、タペストリーの中に、実際に生じたことを見ようとしているが、かれは、タペストリー制作目的を理解するためには、同時代人の目で見ることの必要性を指摘する。11世紀の人々にとっては、地上の出来事は神の計画にもとづいて起こっていると認識されていた。バイユー＝タペストリーでは人間と神との相互交流が描かれている。たとえば、ハロルドがノルマンディーに出発するときにボッシュム教会を訪問していること、バイユーで聖遺物にかけてハロルドが誓約していること、ウェストミンスター修道院が献堂され、神が祝福していることなどである。²⁵⁾

1) 神罰、宗教的教訓

バイユー＝タペストリーの性格づけが困難な理由のひとつは、それが、1064年から1066年の間の出来事をちりばめたウィリアム公の戦勝記念絵巻のように見えながら、同時に、そこには宗教

的教訓が示されているように見えるからである。すなわち、その教訓とは、神（聖遺物）にかけての誓いを破った者は破滅するというものであった。言い換えれば、テーマは、神罰によるハロルドの死ということである。

イングランド王位に対するハロルドの正当性の根拠は、イングランドでのアングロ＝サクソン人たちの支持とカンタベリー大司教スティガンド（在位、1052-70）の承認であった。ただ、スティガンドはローマ教皇と対立していた。他方、ウィリアムの正当性は、王位継承の約束やハロルドの忠誠宣誓に加えて、ローマ教皇の承認、すなわち遠征の聖戦化であった。さらに、ウィリアムが首にかけていた聖遺物の加護もあった。²⁶⁾

キリスト教の世界観において、神への誓約を反古にすることは許されるべき行為ではなかった。ハロルドが即位したときの場面（32・33）では、不吉な前兆である流れ星が出現しているし、下の縁部分では、ノルマン人の侵攻を示唆する幽霊船が描かれている。これらから推測すると、タペストリーはハロルドの王位継承は正しくないことを示している。つまり、ウィリアムの王位継承こそが正当であり、誓約に違反したハロルドを倒すことが正当化されていることになる。

タペストリーにおけるオドーの描き方は、ある意味で、創作上のオドー像であるといえる。すなわち、それはバイユー＝タペストリーという作品によって影響されている。ノルマン征服がテーマであればそれに応じて、誓約違反への神罰がテーマであるとすれば、また性格はちがってくる。スペース的にも限定されているタペストリーでは、関連事項のみが描かれている。したがって、司教であるオドーの聖務はテーマに無関係であるがゆえに描かれることはなかったが、ウィリアム＝オヴ＝ポワティエにしてもオドーが聖務を行わなかったとは述べてはいない。²⁷⁾

ギャメソンの表現を借りれば、オドーは教会人ではあるが、近代のキリスト教伝道師として頑強な身体をもつことが期待された「肉体的キリスト教徒」のモデルとして描かれているかのようである。ハロルドは誓約違反を犯した。タペストリーに描かれているように、ハロルドがバイユーで誓約を行ったのであるとすると、その事実は、間接的には、バイユーの司教オドーの積極的関与を示唆していることになる。バイユー司教座教会の聖遺物の効力や神罰を強調しているとみなされるからである。²⁸⁾

ノルマン征服の正当化のためであれば、パトロンはイングランド王となったウィリアムでも王妃マティルダでもよかったはずである。しかし、オドーがパトロンであるという立場からすれば、ハロルドの偽誓を神が罰したことを示すことでバイユー司教座教会の聖遺物の効力を誇示しようとしたと解釈されるのである。タペストリーでは、ハロルドがひどく不名誉に描かれているわけではない。かれの身分的高貴さにもかかわらず、誓約に違反した場合には容赦なく神罰がくだされることを強調することで、バイユーの聖遺物の威光をいっそう高めようとしたのかもしれない。ハロルドの身分が高貴であればあるほど、破滅をもたらした聖遺物の効果は絶大に思われた。

誓約場面についてはさらに、その誓約の対象がだれであったのかが問題となる。タペストリー

の場面描写からはウィリアムに対して誓っていると解釈されるが、それならば誓約違反はウィリアムに対する裏切りであったのか。しかし、誓約は聖遺物、聖人、神にかけての誓いであり、その違反は神に対する裏切りとみなされたのではないか。そうであれば、ウィリアムに対する裏切り者ハロルドというだけでなく、偽誓者ハロルドという側面が強調されていることになる。

こうした文脈で理解されるとするならば、バイユー＝タペストリーの主人公がウィリアムであるかハロルドであるかは、それほど重要ではなくなる。また、タペストリーを性格づけるために主人公の決定という困難な問題にこだわるより、主人公がだれであろうと変わらないテーマは何かということが重要になってくる。タペストリーでは、ハロルドが捕まり、釈放され、宣誓し、違反して即位し、戦い、そして破滅する一連の物語が展開している。物語のメッセージは、神に選ばれたウィリアムが偽誓者ハロルドを討ったということである。このような解釈からすると、バイユー＝タペストリーの制作目的が、一見すると征服の正当化であるように見えながら、さらには、神にかけての誓約を破った人物の破滅への運命を描くという宗教的教訓へと変化していくのである。

2) ロマネスク

11世紀のヨーロッパは、司教の聖俗の機能についての分化が始まる時期であった。²⁹⁾ オドーは、司教位があるバイユー司教座教会で高い評価を受けていた。ウィリアム＝オヴ＝ポワティエもオドーが聖俗両方の事柄に精通しているとして高く評価している。オドーは若い聖職者を、学問を受けさせるために派遣していたし、また、寄進者としても寛大であった。³⁰⁾

オドーの行動はグレゴリー教会改革以前のキリスト教会の基準に一致した行動であった。当時は、ローマ教皇でさえ戦争にかかわることがまれではなかった。レオ9世(在位、1049-54)は1053年南イタリアのノルマン軍に対して悲惨な軍事遠征を行っている。11世紀、聖職者の理想像をもとめて教会改革が進められ議論はされたが、いまだ合意され実効あるものとはなっていなかった。³¹⁾

勇敢な戦士としての聖職者像は、『ローランの歌』の大司教トゥルパンがフランク人をロンスヴォーで戦うよう熱心に勧めて多くの異教徒を死に追いやったごとく、それまで広く社会的に受け入れられてきていた。ギャメソンは、軍事的功績が当時のキリスト教思想の基本部分をなしていたと指摘する。軍事的功績はオドーやバイユー＝タペストリーにとってきわめて関連性のある事柄であった。司教オドーはこうした価値観を体現していたし、ウィリアム＝オヴ＝ポワティエのオドー評価にもそのことがうかがわれる。教会改革者として理想的で攻撃的なグレゴリー7世(在位、1073-85)でさえ、こうしたキリスト教の価値観を共有していた。ウルバン2世(在位、1088-99)は明確なかたちで十字軍思想を表明していく。こうして聖職叙任権闘争や十字軍運動の検討からは、11世紀においては「聖」と「俗」が区別できないほど織りまぜになっていたことが

理解される。³²⁾

聖俗の区別は現代の研究者の立場からのものである。いったい、バイユー＝タペストリーで描かれるノルマン征服でさえ世俗的テーマと言い切れるのであろうか。1066年ノルマン征服では、ウィリアム公は教皇アレキサンダー2世（在位、1061-73）の承認を受け、かれから教皇の旗を得ていた。まさにその戦いは聖戦であった。さらに、1095年クレルモン公会議につづく十字軍遠征では、教皇代理としてル・ピュイ司教アデマールが総指揮を取っていたのである。

11世紀末頃とみなされるバイユー＝タペストリーの作成時では、いまだ聖と俗の区別はあいまいで未分化であった。その意味では一元的あるいは一体的であったといえよう。タペストリーに描かれるバイユー司教オドーは、聖職者でありながら、ウィリアムが艦隊を建造したり、ヘイスティングズ築城を決定したりするのを助言し、さらにはノルマン軍を励ますべく戦場にも登場している。まさに神の下僕として、神から世俗的権力の行使を委ねられているウィリアムと協力しながら、偽誓者ハロルドを破滅へと導いたのである。ここには聖俗の協同を認めることができるのではないか。また、それこそがロマネスク的であり、11世紀の時代的特徴であったといえるのではないか。

11世紀のヨーロッパ人が共通の世界観を持っていたとしたら、それはキリスト教的見方であった。すなわち、地上の出来事は、それらが世俗的な事柄と見える場合でも、すべては神の計画によるものとみなされたのである。宗教的な事柄も世俗的な事柄も、すべて神の計画に基づくというキリスト教的見方である。バイユー＝タペストリーは、ハロルドを偽誓者として位置づけることで、ウィリアムのノルマン征服を正当化しようとするものである。内容は戦闘場面など世俗的なものが多く扱われており、一見すれば、教会での展示には適切でないように思われるかもしれないが、しかし、これこそが聖俗未分化であったロマネスク期の作品の特徴なのであろう。さらに、そうした特徴は、最も宗教的な人物として描かれているにもかかわらず、艦隊の建造を助言したり、参戦したりと、軍事的役割を果たすオドーの存在によって示されている。バイユー＝タペストリーは、まさにロマネスク期の時代性を非常によく象徴している好例であり、また、タペストリーの中で「聖」と「俗」を統合している象徴こそがオドーの存在なのであろう。

おわりに

バイユー＝タペストリーはバイユー司教座教会の聖遺物の力を証明し、信者をひきつけるためのものであったのかもしれない。たしかに、ハロルドはバイユーの聖遺物にかけて誓い、それを破ったために罰せられた。偽誓者というモチーフは、バイユー＝タペストリー以前にも使われていたようであり、³³⁾ 偽誓、処罰、死というハロルドの運命は容易に想起されたはずである。その場合、現代の研究者が問題にする誓いの内容はそれほど重要ではなく、誓ったという事実が重要となる。ハロルドの運命は聖遺物の力を示す格好の事例であったのである。ノルマン征服とい

う重大事件も時間の経過とともに、正当化の必要性もそれほど感じられなくなり、あるいはオドーの役割も忘れられていくにつれ、ハロルドという人間、またイングランドの運命さえ破滅へと導いた聖遺物の力が強調され、タペストリーが展示された教会の威光を高めていったであろう。

地域的影響を受けつつ完成していったのがロマネスクの特徴であるとすれば、バイユー＝タペストリーは、イングランドの伝統技能とノルマン人の独創性が結合した作品であるといえよう。それは、特殊北西ヨーロッパ地域の文化的融合の結晶であった。バイユー＝タペストリーが描いたのはイングランドのノルマン征服であり、それは異民族・異文化接触の一事例であるが、あくまでキリスト教世界内部の話であった。その点で、南イタリア、シチリアのノルマン征服とは異なる。聖戦であったと言えるが、異教徒に対する十字軍であったとは言えない。ノルマン征服を正当化しようとするならば、アングロ＝サクソン人に納得させるために、その戦いが「聖戦」であったのであり、ハロルドの破滅は「神罰」であったと、相手の理解できる概念で説得することが重要であった。タペストリーに見られる多元性とは、ひとつの世界観の中で異なった文化的原理が重層的に織りなしているものである。

バイユー＝タペストリーとは、キリスト教的世界の中で、北西ヨーロッパの地域的影響を受けつつ作られたロマネスク作品である。キリスト教徒によるキリスト教徒に向けての創造物である。共通の宗教的世界観を背景として、政治・民族的（ノルマン征服とノルマン人支配の正当性）、個人的（オドーの英雄物語）、経済的（聖遺物の威光による巡礼者の誘致と収入増）、芸術的（刺繍による図像描写）など多様な要素、文化的原理が統合されているのがバイユー＝タペストリーである。

註

- 1) ジョージ＝ザーネッキ著、齊藤稔訳『西洋美術全史 6、ロマネスク美術』グラフィック社、1979年。pp.11, 19-20. グザヴィエ・バラル・イ・アルテ著、西田雅嗣訳『中世の芸術』白水社、2001年。pp.80-87. 池上俊一『ロマネスク世界論』名古屋大学出版会、1999年。pp.67-68. ジョルジュ・デュビー著、小佐井伸二訳『ロマネスク芸術の時代』白水社、1983年。p.133.
- 2) 馬については、R.H.C.Davis & M.Chibanll ed.& trans., *The Gesta Gvillelmi of William of Poitiers*. Oxford, 1998. [WP] pp.16-17. 本稿での場面数は、マックナルティー、ミュッセ、パリスタたちと同様に、タペストリーの場面外に記されている番号によっている。J.B.McNulty, *The Narrative Art of the Bayeux Tapestry*. New York, 1989; L.Musset, *La Tapisserie de Bayeux*. 1989; M.Parisse, *The Bayeux Tapestry: An XI th Century Document*, trans. by W.Courtney. Paris, 1983.
- 3) R.Gameston, "The Origin, Art, and Message of the Bayeux Tapestry," in Do.ed., *The Study of the Bayeux Tapestry*. Woodbridge, 1997. pp.157-211. esp.174.
- 4) Gameston, pp.174-5.

- 5) Gameson, pp.15-6.
- 6) 航海途中で嵐にあったとの可能性もある。WP, p.69, n.4; M.Rule ed., *Eadmeri Historia Novorum in Anglia*. RS81. London, 1965 (1884). pp.6-9. 他方、マックナルティーは、場面の説明文の細かな検討から、この航海が順風によるものであったと結論し、それゆえ一層、ポンテュー伯領へと漂着したハロルドのどうしようもない不運を示唆しているのである。McNulty, pp.68-69.
- 7) ウィリアムは、娘のひとりをはロルドと婚約させたとする記述もあるが、M.チブノールは、こうした詳細は歴史的に信頼性がないと判断している。M.Chibnall ed. & trans., *The Ecclesiastical History of Orderic Vitalis*, Oxford. [OV] II (1969), pp.136-7, n.1.
- 8) WP, pp.70-71; OV, II, pp.136-7.
- 9) ただ、エドワード王がウィリアムの王位継承を確認するためにハロルドを派遣したのであるとすると、帰国後のハロルドがどの点を譴責されたのかが疑問になる。エドワードの命令で派遣されていたと解釈するならば、忠誠宣誓もそれほど問題にされる必要はなく、帰国後の接見場面は、単に結果報告している場面であると解釈すべきかもしれない。首をうなだれていると解釈するマックナルティーのボディーランゲージ解釈も、この場面では少々疑問が残る。McNulty, p.70.
- 10) D.J.Bernstein, *The Mystery of the Bayeux Tapestry*. Chicago, 1987. p.25.
- 11) Bernstein, p.26.
- 12) Bernstein, pp.166ff.
- 13) M.Chibnall, *Anglo-Norman England, 1066-1166*. Oxford, 1986. [ANE], p.217.
- 14) E.M.C.van Houts ed. & trans., *The Gesta Normannorum Ducum of William of Jumieges, Orderic Vitalis, and Robert of Torigni*, Vol.II. Oxford, 1995. [WJ] PP.172-3. チブノールは、ジュミエージュ修道院建築に関連して、「新たなアングロ＝ノルマン的ロマネスク」という表現を用いている。Chibnall, ANE, p.217.
- 15) Gameson, pp.176-7.
- 16) バイユー＝タペストリーではスペース的制約もあってか、オドー1人のみが相談役として描かれているが、歴史家ウィリアム＝オヴ＝ポワティエは、ウィリアムが有力者・司教・修道院長たち側近と相談したと伝えている。側近とは、Ralph of Conches, William of Warenne, Hugh of Grandmesnil, Roger of Montbray, Baldwin and Richard, the sons of Count Gilbert of Brionneたちである。WP, 100-101, n.3; OV, II, pp.140-2.
- 17) 他の歴史叙述がオドーの参戦に言及していない点に注目すべきである。Gameson, p.177. それだけバイユー＝タペストリーがオドーに特別の位置を与えているといえよう。
- 18) D.Rollason ed. & trans., *Symeon of Durham, Libbelus de Exordio atque Procursu istius hoc est*

- Dunhelmensis Ecclesie*. Oxford, 2000. pp.218-221. これは、ダラム司教Walcherがノルマン人やフランドル人100人とともに殺されたことに対する処罰目的の遠征であった。D.C.Douglas, *William the Conqueror: the Norman Impact upon England*. Berkeley, 1964. p.241.
- 19) Gameson, p.177; WJ, PP.120-1, n.1.
- 20) McNulty, pp.64-65; Parisse, p.54; R.A.B.Mynors, R.M.Thomson & M.Winterbottom ed. & trans., *William of Malmesbury, Gesta Regum Anglorum*, I (1998), Oxford. [WM] pp.454-5.
- 21) C.N.L.Brooke, *The Structure of Medieval Society*. London, 1971. p. 51.
- 22) 山代宏道「1075年反乱と歴史家たち」『広島大学文学部紀要』55 (1995), pp.79-98. p.85; P.McGurk ed. & trans., *The Chronicle of John of Worcester*, III. Oxford, 1998. pp.24-25; WM, pp.454- 5 ; WP, pp.124-5.
- 23) WP, pp.166-7, 124-5; Gameson, pp.178-9.
- 24) OV, IV (1973), p.278; Gameson, p.179.
- 25) Gameson, p.176.
- 26) WP, pp.124-5.
- 27) Gameson, p.178.
- 28) タベストリーの描写(23)からハロルドがウィリアムに誓約している場所がバイユーであったと解釈されがちであるが、前の場面(22)でバイユーへ向かうとあるのが、つぎの誓約場面にまで結びつくのかどうかという点をめぐって議論がある。ウィリアム=オヴ=ポワティエは、ハロルドはポンテュー伯ギーからウィリアム公によって釈放された後、Bonnevilleで開催されたクリスマス会議で忠誠宣誓を行ったと述べている。WP, pp.70-1, n.2. Gameson, pp.180-1.
- 29) 山代宏道『ノルマン征服後のイングランド教会—アングロ=ノルマン聖職者をめぐる「聖」と「俗」—』(広島大学文学部紀要、51-2, 1992)。
- 30) St Augustine, St Albans, Rochesterにも寄進している。Gameson, pp.177-8; WP, pp.166-7.
- 31) Gameson, pp.178-9.
- 32) WP, pp.164- 5 ; Gameson, p.180-1.
- 33) Parisse, pp.51, 45.

Cultural Multiplicity in Bayeux Tapestry

Hiromichi YAMASHIRO

Bayeux Tapestry (BT) depicts the Norman Conquest (1066). It is a typical example of Romanesque arts. In the 'Tapestry' with woolen embroidery on linen cloth, a variety of animals, plants, and human beings are depicted as well as the main story. They remind us of the sculptures at the capitals and friezes in the Romanesque churches.

This paper clarifies the cultural multiplicity in BT. BT was created as a result of contact between Normans and Anglo-Saxons. The theme is Norman, but the technique is famous Anglo-Saxon embroidery. In BT, present people try to find what really happened, but medieval people regarded all earthly happenings as divine scheme. Sanctity and laity were not yet separated. As a cleric, Odo bishop of Bayeux appears in the scenes; Williman decided to build the fleet for expedition, and to build Hastings castle, and Odo in the Battle of Hastings to encourage young soldiers. As a God's servant, Odo cooperated with William to punish perfidious Harold to his death. Here we can see the cooperation between sanctity and laity.

BT depicted the Norman Conquest of England. It was an example of interactions between different people and cultures. But, it was a story within the Christian world. The cultural multiplicity in BT is an interwoven layers of various cultural principles within one world viewpoint.